空見上げる葦

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空見上げる葦

【Ｎコード】
Ｎ０８３８Ｊ

【作者名】
光差す海

【あらすじ】
大学生の良平は、平和デモに参加したり教会へ足を運んだりしながら、「神」の存在について思考していたが……。悩める青年の葛藤を書いた作品です。

（前書き）

この小説はキリスト教徒ではない作者が書いております。クリスチャンの方で、これはおかしい、等という指摘があれば感想欄に書いていただければ幸いです。

荘厳、とはこのような感じなのだろうか。信者とはすなわち普通の市民に過ぎず、決して選ばれた聖徒などではない。真崎良平は座った椅子の硬さも忘れて、そう考えながらひたすらカトリック信者達の賛美歌に聞き入っていた。

クリスチャンでなくとも教会には来ても良いのですよ、是非一度いらっしゃい、と、ある市民団体主催の平和デモ集会で出会った神父である森本恭介に言われて、では一度行きます、と良平は返事をして、本当に日曜日に一人で電車に乗って、地図片手に森本神父のいる大山カトリック教会にやってきたのだった。

称えよ　人の罪故に　十字架につきし君を
君こそ　とこしえの岩よ　変わらぬ　我が望みよ
心の病　ことごと　癒され　安き受けぬ　※1

パイプオルガンの音を生で聞いたのも初めてだ。良平は歌詞すら知らないので座ったまま礼拝堂に備え付けられた座椅子の後ろのほうに座っていた。後ろからなので人の表情はわからないが、みなが真摯に歌っているのは伝わる。歌詞と言うよりも音を聞いていた。前ではあの白髪混じりの柔らかい表情をした森本神父も大きく口を開けて歌っている。不思議な魅力を感じる人だ、と思っていた。

歌はやがて終わり、別の神父さんが教壇のような場所に立ち、厳かに聖書を開き、説教を始めた。

「みなさんおはようございます。外岡でございます。ようやく涼しくなってまいりましたね。ご年配の方の中には、熱中症などになってしまわれた人もいたようです、くれぐれも体調には気をつけてください。さて、今日は新約聖書のマタイ伝の一節を引きましょう。

６章の３４節にこうあります。”明日の事は明日が心配します。その日の苦労はその日に十分あります”と主イエスは言っております。何故私が今日この言葉を選んだか、それは現在の日本が先の見えない不況に見舞われており、みな、明日はどうなるんだろうと不安に感じているのでは無いかと思うからです」

神父は、ゆっくりと言葉をかみ締めるように話し、明瞭で聞き取りやすい。良平は真面目に耳を傾けていた。

「……続くマタイ伝の７章の９から１１節には天の父が慈悲深く我らを生かしてくださることが確約されています。不安に負けてはいけません。恐れず、日々の仕事をこなしましょう。光は必ず見えてきます」

良平は、この辺りで軽く首をかしげた。つまりただ信じろ、という事か。ま、宗教だからこう話すのはお約束だよな。その後、変わって森本神父も教壇に立ち、平和の尊さとイエスの愛をアフガニスタンとイラクの戦争とテロルへの反対の思いを込めて話した。熱が入っていて、聴衆も何度も頷いていた。やはりクリスチャンは平和主義者だな、と良平は熱くこみ上げるものを感じた。森本神父の説教が終わり、その日の礼拝は終わったようだ。良平は椅子を経ち、森本のそばへ歩み寄った。

「森本神父様、ありがとうございました」

「真崎さん、お疲れ様。いかがでしたか？」

「カトリックの人たちの礼拝が見れて、敬虔というものが何となく分かった気がしました」

「是非また来週もいらっしゃい。いつでもここの扉は開いているから」

開いている、叩けよ、さらば開かれん、か。良平は森本神父と握手をし、信者達に混じって教会を後にした。だいぶ年季の入った造りではあるが、清潔な印象だった。だが、良平の魂の飢えを満たすにはやや足りない気がした。あそこにいる人たちは一つの教え、一つの信仰を疑いも無く受け入れていると思った。彼はそこまで単純

にはなりきれない、と自分の厄介な精神のありようを持て余した。何故自分がそうなのか、も掴めない。軽い苛立ちを覚えたが、その理由の一つはわかっていた。あそこにいた人たちが羨ましいのだ、と。

翌日、良平は通っている大学の講義を聞きながら、新約聖書を開いて読んでいた。使徒行伝は弟子の布教のための奮戦が良く分かる読み物として面白い。特にペテロやステファノ、パウロと言ったイエスの弟子らの記述は興味深い。イエスは異端者としてピラト総督に捕まり、十字架の上で殺された。その後、弟子らは逃げていた裏切り者だったくせに、復活したイエス・キリストに出会うとすぐに改心、ローマ帝国の迫害に遭い処刑される最期まで信仰を捨てなかった。

良平は目を閉じて考えた。復活なんて現実にありえるのか。常識で考えると、ない。だが、イエスの復活が無かったとするなら、卑怯者の弟子達の突如の豹変の理由がわからない。イエスを売ったユダはともかく、ペテロもヤコブもヨハネもみなイエスが捕まる時にさっさと逃げた。一人処刑されたのはイエスのみだった。そんな連中が何故、教祖が殺された後熱心なキリスト教信者になったのか？ここまで考えると、復活かそれに近い奇跡が起こったとしか考えられないのだ。しかし、それがそうだとしても……。良平はそこで行き詰まる思考を止めた。その先の答えを確かめるために教会にまで足を運んだのだ。だが、飛び込む決断は出来なかった。彼は頭をかいて携帯を取り出した。

講義が終わった午後、良平は枯れの所属するＰｅａｃｅ　Ｍａｋｅｓ　Ｄｒｅａｍと言うサークルの部室に足を運んだ。奥の平机で部長の友田がパソコンのキーボードを忙しく叩いている。雑多に並んべられたパイプ机の上で、何人かの部員が折り紙で何かのオブジ

ェを作っていた。
「こんちはーっす。これはまた今度何かあるんですか？」
赤い眼鏡の女の子が顔を上げて、そうよ、今度またユニオン労組が派遣切り反対のデモ行進をするからお手伝いするのよ、と答えた。
「真崎、ちょっときてくれ」
友田に声をかけられ、側によると、これを読んでくれ、と言われた。モニターにはＷｏｒｄが起動してあり、ビラの文言を考えているんだ、と言う。

”派遣切りを止めさせよう！　大企業は内部留保があるのだから従業員を切るな！”　と大見出しがあり、その下に細かく数字を並べて、一部の大企業は派遣をこき使い人件費を削減し、黒字を確保して膨大な内部留保を溜め込みながら、リーマン・ショックが起こるや即座に一斉に解雇を始め、今もそれは続いている、その一方役員や株主に対する分配は増やしている、こんな理不尽な経営を止めさせよう、と書いてあった。

「とてもいいと思います」と良平は素直な感想を言った。友田は満足そうに顎をなで、労働問題も俺達の重要な課題だからな、と笑った。そしてその後、延々といつものように資本主義の害悪を説き、上手に統制経済をコントロールするのが一番いいんだ、と締めた。そうですね、と言いながらも、良平はいわゆる社会主義、共産主義には何も共感していなかった。卑しくも少しばかり政治や思想を勉強すれば、ソビエト連邦がいかに失敗したか、或いは今の中華人民共和国や朝鮮民主主義人民共和国がどのような有様か、誰でも知っているからだ。良平がこのサークルに参加したのは、平和と言うものの意味と意義を大学生になるまでに自分なりに理解したからだった。折り紙作りをしばらく手伝って、やがて家に帰った。

良平が平和に強い関心を示すようになったのは中学生の時に公営

放送の特集で神風特攻隊の映像を見たときからだ。今でもその衝撃を覚えている。パイロットが乗った戦闘機が敵の戦艦に文字通り体当たりをし、大爆発が起こった。これは、映画じゃないのか？つまり、作り物じゃないのかと自問した。一緒に見ていた母親は涙を潤ませていた。良平も少しだけ泣いた。その後、もっと特攻の事を知りたくて、書店で特攻について書かれた本を買ってきて読み、その概略は掴んだ。自分と同じぐらいの年齢の人が必ず死ぬ体当たりを志願して、雄々しく散っていった。一体それはなんなんだ、何故そんなことをせねばならなかったのか、と考えた。まだ死にたくなかっただろう、とも考えた。やがて、彼なりに達観した。彼らを心から尊敬するとともに、そのような事が再び起こる未来にしてはいけない、と。それには、戦争を起こさない事だ。この考えは今も全く変わっていなかった。彼は、そこを基点として、思想や宗教に関心を持つ青年になっていった。

ある休日、良平は恋人の柳めぐみと共に海に面したショッピングモールへ出かけた。めぐみが服が買いたい、と言うのでついていく形だ。高校生の時同じ陸上部だった。もっとも良平は腰を痛めてしまって二年生の終わりに引退してしまったが。最初は仲のいい友達だったのが、三年になったころ、自然と交際することになり、大学二年生の今までずっと付き合っている。良平はめぐみしか女性を知らない。

「それでね、秋穂の奴、酔っ払ってその男に危うく家に連れて行かれるところだったんだって」

良平はずっと不満だった。めぐみは愛嬌のあるいい娘なのは間違いない。だが、通っている短大では家政科所属だし、はっきり言ってしまうと教養が余り無い。時事問題や、哲学的な話だの、頭を使う類の会話は一切できなかった。今日、良平は彼女の周りのゴシップ話を聞かされるのにほとほとうんざりしてしまった。そこで彼は返事をせず、ひたすらに黙り込んだ。

「ねぇ、聞いてる？何で返事してくれないの？」それも無視した。無意味にショーウインドーを眺める。不意に華やかに飾られた店の装飾や着飾った人々や可愛らしい花の咲く花壇、そう言ったもの全てに唾棄すべき嫌悪感を感じ、足早にそこを去ることにした。
「ちょっと、待ってよ！　私何か悪いことした？ねぇったら！」
　良平は振り返って言った。
「物足りないんだよ、お前じゃ」
　良平は返事も待たずに走った。何かが余りにも足りない、だが、誰に聞けば、何処へ行けば、何をすれば満たされるのか全く見当もつかなかった。

「馬鹿だなお前。女の子は全体的にそんなもんだっての」
　居酒屋のテーブルで親友の高木憲一に言われ、良平はさらにビールジョッキを傾けた。憲一は医大に通うエリートながら、ざっくばらんな気さくな男なので、良平はしばしば小難しい、読んだ本で手に入れたばかりの知識をまくしたてていた。
「そうかも、ね。でも、今はあいつと一緒にいる気がしないからさ」
「メールとか来ないの？」
「来まくる。今は連絡しないでくれ、って言っといた」
「ふん。そんで、お前は何の話をしたいんだ？」
　憲一が汁の垂れそうな湯気の出た焼き鳥に噛み付きながら言う。
「神は何故世界をこのように作ったか、ってことだ」
　良平は毎日夜寝る前に問答している命題を慎重に口にした。
「このように、って、どう言う事だ？」
「世界史を見れば、人類の歴史は悲惨と残酷と無念の歴史だ。しかもなおそれは現在進行形で続いている。なぜ神は、神様がいるなら、この世界のあらゆる苦しみを許しているんだ、と言う事」
　憲一は優れた洞察力で良平の主張を理解した。
「神様がいるかどうかもわからないけども、いると仮定して話すと、何か目的があるんじゃないの」

「目的って？」
「うーん、上手く言えないけど、俺らも夏休みの自由研究で朝顔の観察日記とかつけたじゃん？生物の成長の様子を知るために。そしてそんな多くのデータを生かして科学者や研究家は世界をより便利で豊かなものにしたわけじゃん。神様とやらがいるなら、俺達人間を観察して何かを得ようとしてるんじゃないの？空から見下ろして」
憲一は指を天井に向けた。
「うちの医学部ではしてないが、動物学科なんか山ほどネズミを実験材料にして殺してるよ、平気で。罪の意識なんかありゃしない。ああ、一応慰霊碑みたいなの建ててるか。ともかく、神様も同じなんじゃないの？人間が泣こうが喚こうが知らないよ、わしゃデータを取ってるんじゃ、ってな」
「それはあくまでお前の想像だよな。でも、わかるような気もするが」
「俺は大学でドイツ語を勉強してるんだ。その勢いでカントの哲学書も少しだけ原文で読んでみた。お前『純粋理性批判』知ってるか？」
「ああ、言いたいことはわかった。理性の認識外にある事象は考えてもわからない、って言いたいんだろ」
「イエス、サー。まぁ、悩む時期だよな、俺らは。まさに青春だ！俺らの青春に乾杯！」
酔っ払ったのか、陽気そのものの憲一につられ、良平はジョッキを持ち上げた。

その夜、ほんの少しだけ痛む頭を抱えて、良平は憲一の言った事について考えた。とりあえず俺達の思うようなイメージの「神様」がいるとしよう。その仮定に基づいて考えると、この世界の不条理と不幸の度合いはどう考えてもおかしい。さっき見たニュースでも女性がバラバラにされて殺されていた。耐えられぬ事件だ。良平は布団の中で頭をかきむしった。考えても考えても何も答えは出ない。

ひょっとして、神様は無慈悲残酷そのものなのか？俺達の思っているような優しい助けてくれる存在なんかじゃないんじゃないか？その考えは良平を恐怖させた。もしそうなら、何を信じて明日以降を生きればいいのだろう。生まれたての子供は親を全面的に信頼して初めて健やかに育ってゆく。が、もし親に愛されていなければどうだろう。寝返りをうち、自問は続いた。

良平はなんとか世界と未来を肯定したかった。神がいてもいなくても、人間を愛していてもいなくても、ここが生きるに値する場所なんだ、と思いたい。ふと、友田部長の言葉が甦った。

「世界はなんだかんだ言って進歩してるんだぜ。１５０年前まで黒人は売り買いされる奴隷だった。いまやアメリカの大統領だ。戦前は女には参政権すらなかった。今はどうだ。生活保護だって障害者支援だってほんの数十年前には姿形も見えやしなかった。進歩の定義にもよるが、全ての人間の尊厳や権利が守られるようになってきたってのは、お猿さんよりは進歩してるってことだよ。人間は弱肉強食の世界に生きる畜生とは違うんだ。理性をもってして平和と繁栄の中で共存共栄できるはずだ。そうだろ？」

友田は神などという概念を一切使わずに高らかに人間賛歌の言葉を並べてくれた。だが、良平は進歩的な思想、神を否定したニーチェのニヒリズムやハイデッガーの実存主義やマルクスの共産主義の生み出した悲惨も知っていた。ある程度以上、人間の理性を信頼してはいけない。思い上がって神を殺して作り上げた理性や合理や思想が、結果として生んだのがホロコーストであり、強制収容所の拷問粛清だった。煩悶する良平は光を見出せない。そのうちに眠ってしまった。

大学に行っても何も楽しくない。ただ単位を取るためだけに通った。後は、週三回レストランでアルバイトをして何となく生きていた。考えるのに疲れて、その内に神がどうのなどと思考するのも止

めた。めぐみを呼び出して、性行為だけした。だが、そのようなふざけた態度で付き合い続けられるはずも無かった。良平は一人になった。不思議と寂しくは無く、ただ虚しいという感情だけが残った。

ある朝も、大学に行くために駅へ行って電車が来るのを待っていた。人は多かった。良平の横に電動車椅子に乗った老人がいた。だいぶしわくちゃな爺さんだな、などと良平が思っていると、その電動車椅子がどんどん前に動き出し、誰も止める間もなくホームから線路へ落ちてしまった。同時に、踏み切りの信号音が聞こえてきた。電光掲示板の時刻を見ると、間違いなくこちら側のホームに入ってくる。良平に迷いは無かった。すぐに飛び降りて、動けず苦しんでいる老人を助け起こした。重い。人間はこんなに重いのか。

「重い！　みんな引っ張り上げてくれーっ！」

他の駅にいた人たちも集まってきた。数人がかりで引きずり上げる。遠目に入ってくる列車が見えた。良平が飛び上がってなんとかホームに転がった瞬間、特急の列車が電動車椅子をはじき飛ばして猛スピードで通り過ぎた。

良平は駅長室に案内され、そこに横たわる老人と対面した。眉の上に絆創膏を貼った老人は、どうもありがとう、本当にありがとう、と手を差し伸べてきた。良平はその手を握り返し、痛いところはない？怖かったでしょう、などと声をかけた。

「救急車は呼んであります。おそらく打ち身程度だと思いますが」

駅員がそう声をかけながら、この後もしかしたら警察から感謝状の付与などがあるかもしれません、住所とお名前をお願いします、と頼んできた。

「いいです、そんな事のために助けたんじゃないし」

救急隊員が入ってきたのと同時に駅長室を出た。良平は、実はずっと体が震えていた。轢かれそうで怖かったなどではない。自分が人一人の命を救えた事に感激していたのだ。それは彼に大いなる示

唆を与えた。俺にも出来る事があった。まさにそれは良平が遂に見出しえていなかった道であった。迂闊にも、デモ行進ぐらいしか思いつけなかった。出来る事を、探そう。ホームに軽快に入ってきた電車に乗り込んだ。車窓から見える真っ青な青空は目に痛いほどだった。流れる美しい雲を見ているうちに、良平の迷いは穏やかに消えていった。（終わり）

（※１　引用　聖歌４８４　称えよ救い主イエスを）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0838j/

空見上げる葦

2010年11月12日16時25分発行